



108

公益財団法人セゾン文化財団

【vju:póint: 視点、観点、見地、立場】

セゾン文化財団ニュースレター 第108号
The Saison Foundation Newsletter2025年12月20日発行
20 December 2025<https://www.saison.or.jp>

【特集】

海外での旅が育む、エンパワーメントの可能性

近年、国際交流への支援は「海外市場への展開」や「成果の可視化」といった経済的・戦略的な視点が強調される傾向にある。海外で発表の機会を得ることは創作活動の展開において重要である一方で、海外に旅に出ること——つまり、海外での経験そのものにも多様な意義があるのではないだろうか。

本特集では、サバティカル、海外リサーチ、アーティスト・イン・レジデンスへの参加経験のある方々に、それぞれの海外滞在や交流を通じた経験と、そこから得た考察を詳しく紹介していただいた。未知の人・土地・文化との出会いや、対話・交流を通じて自己が揺さぶられ、変化していく可能性、すなわちエンパワーメントの可能性に光を当て、国際化とは何かを考えるきっかけとしたい。

01

石原 燐

Nen ISHIHARA

偏見と演劇

—ロンドン・ニューヨーク3ヶ月の旅

旅の前夜—フェミニズムの波のあとで

戯曲でも小説でも、見知らぬ場所を舞台にして作品を書くときは、できるだけ実際にその場に行ってみたい。行ったところでただの観光みたいになってしまうことも少なくない。それでも、その場の空気やにおいを体感することで、言葉の肌触りがほんのわずかに変わると信じている。

また、作品の取材ではない旅行も、よくしている方だと思う。以前取材で出会った人に再び会いに行くということもあるし、誰かに突然誘われて話に乗ることもある。そういうときは、あの人に会いたい、話したいというのが目的になることが多い。普段、家にこもって、誰にも会わずにいることが多いせいだろうか、観光したことよりも、なんでもない喫茶店でだらだら話し込んだことや、誰かの暮らしを垣間見たことの方が深く記憶に残っていて、そういう時間を持てたかどうかが、旅の満足度を左右している。好奇心で突っ込んでしまって嫌な思いをすることもある。そういうときは落ち込むけれど、それがなにかを創造する発端になったりもする。

とにかく、私にとって、旅とはそういうものだ。
昨年(2024年)、セゾン文化財団のサバティカル助成を利用して、

目次○

[特集:海外での旅が育む、エンパワーメントの可能性]

01 石原 燐

偏見と演劇—ロンドン・ニューヨーク
3ヶ月の旅

02 升味加耀

私はどこにいるのか?

03 森下真樹

エベレスト街道を歩く旅と、ベートーヴェンの
ルーツを辿る旅、2つの縦走

04 山本麦子

旅が与える力—正解のない世界を歩く—

人生で初めて3ヶ月を超える旅をした。それは、少し異色の旅だった。特定の作品の取材ではなく、友だちに会いに行くわけでもない。

きっかけは、上演した作品の映像字幕のために、台詞の英訳をニューヨークの友人にお願いしたことだった。作品のタイトルは『彼女たちの断片』。薬を使って中絶をする女性に、6人の世代も背景も違う女性たちがつきそつ一夜の物語だ。この作品を上演した数ヶ月後に、アメリカで中絶の権利を認める根拠とされてきたロー対ウェイド判決が覆されたので、性と生殖の権利が後退することに抗う人たちに連帯する気持ちで、字幕をつけることにした。できあがつた英語版の台本に思いのほか反響があり、何十年かぶりに欧米に行ってみたいという気持ちが沸いてきたとき、英訳をしてくれた友人がサバティカルのための助成金があることを教えてくれた。これまで、この手の助成金を調べてみようと思ったことはなかった。助成金といえば、海外公演や、具体的になにかの勉強をするためにしか使えないものだと思い込んでいた。私は劇作家だから、公演の制作に関わることはなし、劇作の勉強をするには受け入れてくれる団体を決めなくてはならない。少なくともディスカッションに参加できる英語力も必要だ。けれど、サバティカルなら、休暇や充電が目的だから、特に公演の予定や、受け入れてくれる団体がなくても申請できるという。せっかく行くのなら、ロンドンを中心に、ヨーロッパやニューヨークを回って帰ってくるのはどうだろう。『彼女たちの断片』を執筆するために、欧米のことも調べていたので、この機会にお世話になった人たちにも会いに行きたい、そんな風に夢を膨らませたら元気が出た。

その頃の私はとにかく疲れ切っていた。#MeToo運動などをきっかけに、2018年頃から盛り上がっていたフェミニズムは、すでにバックラッシュの時代に入っていて、女性を支援する団体への嫌がらせがひどくなり、運動を分断しようとする力も強くなっていた。

不幸にも、この年になるまで、フェミニズムを本格的に学ぶことなくきた私にとって、フェミニズムの盛り上がりは輝いて見えた。同じ属性を持つ者同士で集い、語り合うことがこんなにも楽しく、力をくれるものだなんて、思いもしなかった。自分の傷を、傷だと自覚し、それを言語化していくと、世界が少し違って見える。それは価値観を変え、作品を変える。私はフェミニズムの波に乗り、全速力で走り抜けるように、作品を書いた。その一つが2021年に初演された『彼女たちの断片』だ。

けれど、それは転轍も生んだ。これまで私を応援してくれていた人でも、中絶がテーマだというと反発する人もいる。どれだけ言葉を費やしても通じない、何度も同じことを聞かれ、説明を求められる。おまけに、自分の被害を自覚することは、自分の加害を自覚することでもあって、ときどき、被害と加害の記憶がひとたまりの黒い波になって押し寄せてくる。仲間と手をつなぎあっていれば乗り切れる波も、バックラッシュのなかで新たな傷を負い、分断されいくにつれて、乗り切れなくなっていく。それだけが理由ではないけれど、気がついたら、次の作品に向かう気力をすっかり失ってしまった。

いま思えば、ロンドンやニューヨークで、最先端の芝居を観て、フェミニズムの運動をしている人たちに会うことができたら少しは気を取り戻すことができるかもしれないというのは、あまりにも安

直で、浅はかな発想だったかもしれない。ただ、日本から、日本に渦巻く暴力から逃れたかっただけなのだ。では実際に欧米に行って、その暴力から逃れることができたのかというと、そうとも言えなくて困ってしまうのだけれど。それでもあの時、私にはあの旅が必要だった。

旅のはじまり——怖れと偏見

旅の始まりはうまくいかないことだらけだった。ちょうど一年前から英語を勉強し始めたものの、一年経ってたどり着けたのは、ぎりぎり中級と言えるかどうかというところで、カプチーノを注文したのに、カップオブティーが出てきたりする。当然、行く先々でアナウンスを聞き逃したり、聞き間違えたりして、お金や時間を無駄にした。食生活もパッとしたかった。外食は高いし、レストランは一人客が想定されていないことが多いので、自炊が中心になる。けれど、凝ったものをつくる気力は沸かないし、スーパーに並ぶ食材もなにがおいしいのかよくわからなくて、毎日似たようなものばかり食べていた。知らない町は正直怖い。ロンドンの治安は悪くない。でも、日本と比べたら、多少は気をつけた方がいいともよく言われる。しかし、多少というのがどのくらいなのかわからない。イギリスでも移民に対する排外主義が広がり、アジア系にも憎悪の矛先が向けられていると思うと、日本人女性である自分はどうしたって神経質にならざるを得ない。マジョリティには必要な警戒を強いられる、それが差別の対象となるということだ。

アパートの部屋には冷房がなく、窓を開けていると、外の音が容赦なく入ってきた。毎日のようにパトカーがけたましい音を立てて通り過ぎる。明け方、騒ぐ人々の声で目が覚める。瓶やグラスが割れる音もする。音に不安を煽られて、警察のサイトで町の犯罪件数を確認したら、びっくりするような数が出てきて、すっかりびびってしまった。怖いという感覚はやっかいだ。その奥底には、差別心や



アパートの近所にあったチャリティーショップの一つ

偏見もきっとある。でも、危険を回避するためには無視するのも難しい。悩んだ末に、その町を推薦してくれたロンドン在住の友人に、別の物件を探そうかと思っていると告げた。

ところが、いざ探してみると、どの町もそれなりの犯罪件数があつて、むしろその町の犯罪件数は少ない方だとわかった。夜芝居の後に電車で帰ってもみた。酔っ払いであふれかえっているのではないかと思っていた通りには、小さい子ども連れの女性の姿もあり、想像していたよりも平穏だった。早朝に聞こえてくる音は、アパートの一階に入っているレストランが朝六時の開店とともに流す有線放送で、瓶やグラスが割れているように聞こえたのは、ゴミの収集車がビン類を回収する音だとわかった。その音も、涼しくなって窓を閉めて寝るようになったら気にならなくなり、その頃には、すっかりこの町に慣れてしまっていた。慣れてしまえば、そこはとても住みやすい町だった。大きなスーパーの他に、ムスリム系の個人商店がいくつもあり、量り売りしてくれる鶏肉のおいしさに驚愕した。シンガポールやミャンマー料理の店でテイクアウトすることも覚え、食生活が豊かになった。近所には、庶民的なチャリティーショップがいくつかあり、休日は近所の人たちで賑わっていた。それらの店を覗いてまわるのは、ちょっとした趣味になった。

結局、友人に引っ越さないことにしたと伝え、この町が好きになってきたと言ったら、「そうなると思ってた」と、友人が笑った。

劇場が映す社会——『The Years』の中絶シーン

アパートのある町を推薦してくれた友人は日本出身の日本人俳優で、ロンドンで観るべき演劇やミュージカルをたくさん教えてくれた。ありがたかったのは、私の英語力を考慮することなく、面白そうなものや、私が興味を持ちそうなテーマのものを教えてくれたことだ。ものによっては、ちんぶんかんぶんの作品もあった。それでも舞台を楽しめるし、得るものもある。それをわかってくれることが嬉しかった。

彼女が紹介してくれたなかで記憶に残っているのは、フランスの作家>Anne·エルノーの生涯を描いた『The Years』だ。>Anne·エルノーは、自らの違法中絶の経験を詳細に描き出し、個人の体験を超えて、時代と社会を映し出した作家で、今回の舞台では、5人の人種も世代も違う女性俳優が、という一人の女性を演じることで作品の普遍性を表現していた。この作品はクオリティも高かつたし、面白かったのだが、中絶のシーンで気分の悪くなる人が続出し、ほとんどの回で、上演が一時中断された。血糊を使って、中絶の様子を一人語りするシーンは確かにインパクトが強かったけれど、個人的には、もっと陰惨なシーンはいくらでも観たことがあるし、あれくらいで?という感覚だった。その後、観に行った友人も同じ感想だったので、私が特別鈍感だと、台詞がわからないせいということでもなさそうだ。身体的な反応と思想はイコールではないけれど、ほぼすべての回が中断したことを思うと、いまだに中絶に対し、偏見を持つ人がいるのだなと思わざるをえなかった。

しかし、考えてみれば、それは不思議なことではないのかもしれない。私自身が、見知らぬ町に慣れるのに時間がかかるように、植え付けられた価値観を変えるには時間がかかる。こと性と生殖の権利に関して、イギリスは日本よりずっと進んでいる。法律的には

日本と同様に「堕胎罪」が残っているとはい、医療的には、出産はもちろん、中絶や、避妊に関する医療サービスも無料だし、本人以外の人の同意を求められることもない。元々、人権教育が日本より進んでいるから、一部に強硬な反対派はいても、一般的には性と生殖の権利が、人権のひとつとして理解されている。しかし、これほど医療制度の進んだ国でも、まだまだ偏見はあって、中絶センターでよくない対応を受けたり、町の薬局で買えるはずの緊急避妊薬を売ってもらえないったりすることもある。法律や医療制度が変わったからといって、パンと手を叩くように人の意識は変わらないのだ。

そして、もしかすると、その部分こそ、創作が力を発揮できる部分いや、創作が担わなくてはならない部分なのではないだろうか。

対話する演劇——偏見をほぐすメソッド

助産師としてロンドンの病院で働くもう一人の友人は、中絶に対する偏見をなくすための取り組みとして、医学生に義務づけられている中絶の教育を、より包括的なものに置き換えようとしている人たちを、私に紹介してくれた。一人は女性医師で、もう一人は社会学の女性学者だ。実際に見ることが叶わなかったので、詳しくは説明できないが、プログラムの中心は、対話によって共感を促すワークショップ形式のメソッドらしい。ファシリテーターのなかには中絶に反対の立場の人もいて、そういう考えを持つ参加者を孤立させない工夫がされていると聞いた。一方的に否定されないことで、参加者は自分のなかにある偏見を認め、なぜ偏見を持つようになったのかを考えはじめるのだという。こういう動きが業界の内部から生まれてくるのがイギリスのすごいところだ。彼女たちの活動はすでに評価され、広がってきており、今後は医学生だけでなく、助産師や看護師などへも対象を広げていきたいということだった。

また、こんなワークショップもあった。

それは、女性の視点が軽視されがちな医療・研究のあり方に対し、市民の声を届けようとするグループが関与するプロジェクトの一環として、妊娠や出産をした女性やその他の性を持つ人たちの語りを共有するワークショップだった。病院内の小さいレクリエーションルームに参加者が集まっていた。アフリカなどからの移民が多く、乳児を連れている人もいる。その日のテーマは「血」で、過去には「中絶」をテーマにしたこともあるという。主催者からの簡単な説明が終わり、参加者が一人ずつ自己紹介をしたあと、まずはテーマから連想することをポストイットに書き、みんなが車座に座った内側の床に貼っていく。猛スピードで言葉を書いていく友人の見よう見まねで、私もいくつかを書いて貼った。それから、2、3人でグループをつくり、テーマから連想したことをお互いに話す。そのとき、相手の話でわからないことがあったら、「Show me」というカードを見せる。見せられた側はもう少し詳しくそれについて説明する。そして、最後には、車座に戻って、グループごとに話したことを他の参加者と共有する。私は、日本人である友人と組み、若い頃、生理で服や布団を汚してしまうことが強迫観念になっていたという話をした。他の参加者の話がすべて理解できたわけではないけれど、なかには、イギリスに来る前に体験した、紛争や虐殺のことを話しているらしい人もいて、一見しただけではわからない、一人一人の抱える歴史の重さに衝撃を受けた。

筆者が参加したBia Story Telling
床に貼られたポストイット

移民排斥デモへのカウンター（ステージ前）



移民排斥デモへのカウンターに参加した筆者

いま思えば、これらのワークショップはどちらも、とても演劇的な試みだと思う。私たちが普段携わっている「観客に見せるための演劇」とは少し違う、「参加する人のための演劇」。誰かに見せることを目的とせず、参加者同士が互いの声を聞き、共感することだけを目的とする演劇だ。

ロンドンから小旅行で訪れたアムステルダムでは、ある女性産婦人科医に会った。彼女は、中絶が困難な世界中の国の中の女性とその他の妊娠する身体を持つ人たちに中絶薬を送り、中絶の支援をしているのだが、アーティストでもあり、演劇的な試みも実践している。帰国後、彼女が来日したときに京都で開催されたワークショップに参加したけれど、みんなで好きなように粘土を捏ねながら、それぞれの経験を語り合うというもので、やはりとても演劇的だった。これらの、「参加する人のための演劇」は、「観客に見せるための演劇」となにが違うんだろう。以前、イラクの子どもたちの支援をしている人から、イラクの人たちのために、民族的な分断を乗り越えるための戯曲が書けないかと打診されたことがあるけれど、安全なところにいる日本人の私に書けることなどないと思った。でも、もし様々な民族が集まるワークショップを実施するところまでこぎ着けられるなら、戯曲がどうあれ、参加者にとって貴重な機会になる可能性はある。気恥ずかしくて好きな言葉ではないけれど、それが本来の「演劇の力」と言えるものなのかもしれない。

役者の経験も、演出の経験もなく、書くことしかしてこなかった自分は、演劇のほんの一部しか見てこなかったのかもしれないという気持ちにもなる。戯曲を全否定するつもりはない。いまさら、ファシリテーターになりたいと思うわけでもない。ただ、自分の作劇を見つめ直してみたいと思った。

声を聴く——街頭から演劇へ

「血」をテーマにしたワークショップに参加した日は週末で、大規模な移民排斥デモに反対するカウンターデモが計画されていた。途中、ランチを食べるために入ったお店が心地よく、そこで話し込みすぎたせいで、私たちが着いた頃にはデモは終わりかけていたのだけれど、それでも、トラファルガー広場付近の道路は人でごった返していた。遠くから眺めた移民排斥デモはいくつもの旗をかけ、物々しかった。似たようなデモは日本にもあるけれど、規模が違う。

これだけの人が移民に敵意を持っているかと思うとやはり怖い。カウンター側のステージでパフォーマンスを観て、人もまばらになった物販テントを見て回り、帰る時に、ブラウスに貼っていたデモ参加者のシールを剥がした。シールを貼ったままだと、移民排斥デモの参加者と、帰りの電車などで鉢合わせしてしまったときに危ないから、剥がして帰るようにと言われていた。そんな人たちに取り囮されることを想像したら怖すぎて、剥がしたら少しホッとした。けれど、助産師の友人は、翌日に会った時にもまだシールを着けていた。彼女が特別に勇敢だということではなく、それだけ切実なのだろうと思った。病院で労働組合の仕事をする彼女は、この地で様々な差別に会い、それと闘って生きている。彼女は、アジア系の自分が組合にいる意味は大きいのだと胸を張り、イギリスでの差別について教えてくれた。「正直なところ、白人から差別されることはそんなに多くないんだよ」と、彼女は言う。差別される属性を持つ人も、また別の属性の人を差別する。なかには、日系人二世から一世に対する差別もあるらしい。

人間が差別や偏見を持つものであるかぎり、日本から出さえすれば、生きづらさから解放されるなんてことはない。一時的に息抜きになることはあるだろう。でも、長く生活すれば、どこであれ、生きることは苦しい。それでも、それぞれの国で、闘い続けている人たちがいる。しかも、そこには演劇的な手法が生かされている。そのことに、思いのほか勇気づけられた。

正直なところ、作品に向かう意欲を完全に取り戻せたわけではない。それでも、いま私は次の作品の準備を少しづつ始めている。法律や制度を変えるための運動より、私は人の意識に興味があるのだということも再確認できた。偏見をなくしたいということも含め、人に伝えたい思いはあるけれど、それ以上に人の声を、できるだけ小さな、耳を澄ませないと聞くことのできない声を、聴き届けたいと思っている。

考えてみれば、『彼女たちの断片』も、女性たちがそれぞれの経験を語る作品で、上演後、観客どうしで語り合う輪が広がったと聞いた。今後、戯曲を書くときに、その部分をもう一步進めることができたら、なにか新しい景色が見えるかもしれない。

演劇は世界を映す鏡だといわれる。であるならば、たくさんの声がそこにあるべきだ。舞台上には直接描かれなくても、舞台上の世

界は、歴史の延長上にあり、他の国々とも繋がっている。そこにいる人たちには聞こえなくとも、世界は声であふれている。この複雑な世界に私たちが生きているということを感じられる作品を、いつかつくりたい。そういう意識を持てたことが、この旅の成果だったと言つていいだろう。



石原 燐 (いしはら・ねん)

劇作家。小説家。2010年、『フォルモサ!』が劇団大阪創立40周年戯曲賞大賞を受賞。2011年には短編戯曲『はっさく』がNYのチャリティー企画「震災SHINSAI: Theater for Japan」で取り上げられた。2020年に自身初の小説『赤い砂を蹴る』が第163回芥川賞候補、2023年に中絶する一夜を描いた戯曲『彼女たちの断片』が第67回岸田國士戯曲賞候補となる。近著に、『彼女たちの断片』の続編ともいえる小説『いくつかの輪郭とその断片』(文學界2023.7月号掲載)。

<https://nenishihara.com>

photo: 篠田英美

02

升味加耀

Kayo MASUMI

私はどこにいるのか？

「あなたはどこにいるのか？」

パレスチナからの参加者、ナラとハラの静かな怒りが充満する展示室で、ドイツ人アーティストに、チリから参加したショセフィーナが投げかけた質問だ。これは、スイス・フリブルールで開催されたパフォーミングアーツフェスティバル・Belluard BollwerkのWatch & Talkプログラムに参加した経験の中で、おそらく一番印象的な問い合わせであり、ドイツ人の彼を一瞬戸惑いで沈黙させると同時に、人知れず私の肺にも突き刺さり、簡単には抜けなくなった。そしてこの呼吸の苦しさは、フェスティバル期間中、すべての忘却の甘えを阻止するための痛みとして、私に作用し続けてくれた。この感覚こそ、私が今後も現実と地続きの創作を続けていく上で、決して手放したくないものになった。

エリザさんとの出会い

今年(2025年)6月から7月にかけて参加したこのフェスティバルを知ったきっかけは、セゾン文化財団のヴィジティング・フェローとして日本を訪れていた、エリザ・リープシュさんのトークイベントに参加したことだった。ドイツやベルギーなどでも活躍し、昨年からBelluard Bollwerkのディレクターになった自身の経歴や豊かな政治性やフェミニズムの側面を持つ招聘作品、それを地域コミュニティにシェアしていく力強いビジョンについての発表を聞いた。イベント後、ぜひもっと詳しくお話を伺いたいと思い、名刺を渡し、過去の公演で唯一英語字幕がついていた『害悪』という作品の映像をお送りし、一度個別にお会いしたい旨を伝えた。そして別日に渋谷でご飯をすることになり、その時にはなんと映像も全編見てくれて

いた。関係性がまだないこういった状態でのアプローチには大体返信されないものと思っていたので、参考動画まですべて目を通しててくれるディレクターの存在は非常に嬉しい驚きだった。だから、彼女が作品についてのコメントといいくつかの質問を前のめりにしてくれた時、密かに感動してしまった。そしてその時も全く流暢ではない英語で冷や汗をかいていた私に、なぜかBelluard BollwerkのWatch & Talkというプログラムの存在を紹介し、参加を勧めてくれたのだ。

宙ぶらりんの私

6月の下旬、初めてスイスを訪れた。チューリッヒ空港に着いて、まず驚いたのは、燐燐と、というレベルを遥かに超えた、人類を焼き尽くせんとするばかりの日差しだった。しかも滞在中、ほぼこの快晴の中で生活することになったのだけれど、現地スタッフに聞いたところ、結構珍しい気候であったらしい。「ビタミンDが止めどなくてクレイジー！最高！」と喜んでいた。どうしても幼少期のハイジと雪山のイメージを捨てきれていない自分に気付いて、空港で驚異的価格のコーヒーを飲みながら反省した。

そこからフリブルールまで2時間ほど電車に揺られている間、スイス人二人にスーツケースを網棚にあげるのを手伝ってもらった。彼らは、「この席空いてる？」と話しかけてきた時にはドイツ語で、そのあととの会話はフランス語だった。ドイツ語圏、フランス語圏と分かれているとはいえ、やっぱり両方話せる人もたくさんいるのだ！という早合点をした私は、10年前、ベルリンに1年間だけ交換留学していた時に覚えた、主に郵便局とDHL、そしてハウスマイスター（寮の理不尽すぎる大家）と戦うためのサバイバルドイツ語を駆使する時が来たか、とメラメラ挑戦に燃えていた。けれどもフリブルールに到着してみると、フランス語圏の都市なので当たり前なのだけれど、ドイツ語を聞くことはほぼなかった。勿論標識などにドイツ語表記はあるにしろ、耳や目から入ってくる情報がほとんど理解できない生活中に、新鮮な気持ちになった。これこそ旅の醍醐味！という嬉しさもあった。フリブルールの街の至るところに掲げられたフェスティバルのペナントや看板を眺めながら、ベルリンにいた時も、授業で話されるナチュラルスピードのドイツ語が全く理解できず、あまりに一言もわか



フェスティバルセンター前のベンチでは、いつもたくさん的人が思い思いに過ごしている



Sara Leghissa『Fuck Your Rainbow Flag』
駅前でのパフォーマンス



パフォーマンスツアー『Ventana al Sur』で渡った激震の橋

らないので、音楽の気分で聞き流していたことを思い出した。また、同じクラスのフランス人の子が誇らしげに、「フランス語は世界で一番きれいな言語、そうでしょ?」と言っていたことも。確かに独自のグルーヴ感である。上演と上演の合間は、アップダウンの多い街を歩きながら、宙ぶらりんの私について考えていた。

実は私、一切学んだことのない言語が飛び交う国で旅をするのが本当に大好きなのだ。恐らくそれは、自分自身が“ここ”に帰属する人間ではない、この国の社会の中では宙ぶらりんな存在である、ということを、程よく体験できる方法であるからだと思う。

つまりは一種の現実逃避で、最早逃げようのない社会の力学構造から、一歩外側にいるかのような幻想を楽しむことができるが、今までの私にとってとても本質的な旅する理由だった。情報は音や形として自身の耳や目をすり抜けていき、脳みそを圧迫することなく通過していく。また、旅の中で出会う現地の人々にとっても、私たち旅行者は時に目立つ個人あるいは集団であるかもしれないが、基本的には長期的に関係を築く必要のない消費者であり、“アジア人”や“日本人”という外見的なアイデンティティのみが彼らの知覚を撫でていく。そう考えると、“私”という人間自身はまるで透明人間になったように、何も残さず、それが心地よいと思っていた。この世界に厳然とそびえたつ大きな搾取の仕組みについて考えれば考えるほど、自分がその歯車の一つになっていることが耐え難く感じられ、逃げ出したくなってしまうのだ。

余りにも優しい周囲と情けない自分について

Watch & Talkは、ヨーロッパ、中東、アジア、アフリカなど多様な背景をもつ批評家・アーティストたちが集まり、毎日2~4作品(!)を観てメンバー同士のディスカッションを重ねるプログラムだ。メンバーは8人で、チリでセックスワーカーとして働きながら自身のアートフェスティバルも主催するジョセフィーナ、パレスチナ出身の映像やダンスなどそれぞれマルチメディアで活動するナラ、ハラ、アウス、南アフリカで作家・俳優として働くレラート、同じく俳優・パフォーマーのジュネーブから来たメリッサ、そしてフリーピールを拠点に活動する

ダンサーのジャミラだった。

英語が共通語だが、フランス語やアラビア語が混じる場面も多い。特に、パーティーや食事の場では、大部分がフランス語の交流になる。言葉の壁がやはり厚い。母語ごとに自然とテーブルが分かれ、私はなかなか輪に入る勇気を持てなかった。とはいっても、国外のアーティストがほとんどを占めるWatch & Talkのメンバーには英語使用が基本であるし、関係者は皆とても気遣ってくれた。特に英語がかなり危なげだった私のことは、申し訳ないほど辛抱強くケアしてくれた。実はたった11日間の滞在だったにも関わらず、30歳にもなってあまりにも不甲斐ない自分が悔しく、最低2晩はホテルの枕をビショビショにしていたので、本当に感謝してもしきれない。特にメンバーのジャミラは、ルームメイトが大阪に留学したことがあり少し日本語がしゃべれるから、とその子に引き合ってくれた。英語でのコミュニケーションに不安とフラストレーションを感じていた私には、この気遣いが本当にありがたかった。相手に対してなんの罪悪感を持たずに、しっかりとニュアンスを選んで話せる機会は、フェスティバル期間を通じて、唯一そこだけであった気がする。

その負い目の正体は、お粗末な英語だけではない。今回のフェスティバルの中では、他者を組織的に非人間化する構造への批判が中心に置かれているように感じ、イスラエルが行うジェノサイドや、植民地主義や人種差別に基づく搾取を描く作品が多く上演、展示されていた。参加者にパレスチナ人3名を含むWatch & Talkメンバーと日々、作品の感想を交換し対話する中でも、その側面について活発な意見交換が行われていた。様々な歴史的背景を持つ各国の文化を色濃く反映し、上演構造自体に強い批評性のある作品を観劇できたことは、創作者として幸運だったことは間違いない。同時に、扱われた多くの問題に対して、加害者としての側面を持たざるをえない“日本人”的私には、すべてのパフォーマンスや対話が突き刺さり、自らの立ち位置を省みることになる経験だった。それは正直なところ、なかなかハードな体験でもあったけれど、自分が創作を続けていく上で、今後絶対に忘れてはいけないと思える瞬間が、自國にいた時とは比べようもないほど多かったように思う。



Eisa Jocson and Venuri Perera『Magic Maids』
終演後に掃除する人々



Joshua Serafin『VOID: Ocean Vessels』舞台



Julian Warner『Le Soldat. A Rite of Passage』舞台

客席にいていいのか?——『Magic Maids』と出会う

上記のようなことを強く感じたのは、特に『Magic Maids』という作品においてだった。フェスティバルの会場の一つ、フォートレスという魔女狩りの絞首刑会場だった場所で上演された、魔女と世界中で搾取される東アジア出身の移民労働者(メイド)をオーバーラップさせた、フィリピンとスリランカのアーティストのパフォーマンスで、メイド地獄というこのテーマに関するドキュメンタリーも見たことがあり、技能研修制度など差別的で問題のある制度で彼らを搾取し続けている日本人として、正直な所とてまっすぐには見ていられず、客席で楽しんでいていいのか、という気持ちが先行してしまった。

全編通して、出演者はほぼ箒にまたがり移動するのだが、それが国境を越えた旅や、時には性的暴行のメタファー、あるいは絞首刑にされたかつての魔女たちや、今尚蹂躪される労働者の人々の姿になるイメージの変遷も、非常に有機的に行われていた。カーテンコールの後、ブリトニー・スピアーズの『Work B**ch』が流れる中、舞台上に演出として撒かれた塩を、観客も彼女たちと一緒に箒で掃く、という労働をし、その対価にチョコレートをもらう。“協働していく”という開かれたラストシーンにも見える反面、おそらく上演中ずっと彼女たちを使役する側(加害者側)として想定されていた観客に対して、後味が悪くないように、というホスピタリティのようにも感じられ、そんなことをする責任も必要もないのに、と勝手にやりきれない気持ちになった。翌日行ったWatch & Talkグループでの意見交換会では、作品の背景があまり分からぬというメンバーもあり、上記の意味で刺さっている人は少なかったようで、むしろ演出面についての方が盛り上がっており、視点の違いが興味深く感じられた。

“善意の第三者”にならないために

そしてその翌日、冒頭のレクチャーを見ることになる。ドイツ出身のアーティスト、モーゼスが作成していたのは、植民地主義の歴史を批判的に読み解くための地図で、様々な文化圏で起きる衝突を、

リサーチを下敷きにチャート式に紐づけ、文化祭のクラス発表のように手書きで巨大な模造紙に書き記し、それぞれの国がどのように搾取の構造に関わったか?という関係性を可視化する展示を行っていた。そこにはもちろんガザについての記述もあった。観客との対話の中で、誤った表記を指摘されれば、それを消しゴムで消し、修正していくのだという。私たちは彼の作品が展示された部屋で、レクチャーを受ける機会を得、およそ1時間、彼の創作への姿勢や目的について話を聞いた。Watch & Talkのメンバーからは、内容について活発に質問が飛んだ。そして彼が誠実に答えようとすればするほど、彼が大きな罪悪感を抱えているのが参加者には見えたはずだ。例えば「せっかく発表するのであれば出版やインターネット配布等媒体を検討してもよいのでは?」との質問があった時、彼はかなり言いづらそうに、今のドイツの状況で書籍を作ることやネット配布を大々的に行うのは難しい、という内容を、遠回りしながら、言葉を変えて繰り返し答えていた。堂々巡りで歯切れの悪い回答、彼の作品が極めて鳥観図的であること、そして実際の社会に対して能動的に行動する意識があまりないように見え、“学術的プレゼンテーション”に留まっていることが、参加者を強く苛立たせていたように思う。

そこで冒頭のセリフが飛んだ。彼はうまく答えられなかった。もし自分が彼だとして、私はなんと答えるだろうか、と考えながら身を竦めていた。一体どうしたら、構造との距離を見誤らずに作品を生み出すことができるのかと考えていた。

そのためのヒントのようなものを与えてくれた作品が、Samah Hijawiの『The Moon in Your Mouth』だった。彼女のパフォーマンスを、私たちは主に中東各地の伝統料理を食べながら、まるで村の長老のお話をゆったり聞くみたいに、リラックスして参加することができた。戦争や貧困などネガティブな側面のみで語られるがちな地域が、クウェート出身の彼女のストーリーテリングによって、覆い隠されてきた豊かな文化的側面が活き活きと照らし出され、パワフルでチャーミングなレクチャーだった。Samahもまた、植物の伝播や食文化について語りながら、床に敷いた大きな模造紙に筆を使い、リアルタイムで地図を書いていたけれど、モーゼスのように間

違ったからと言って線を消すことはない。「ちょっと小さかった?」などと呟きながら、やわらかいストロークで線を加筆していくのだ。なぜならこのパフォーマンスは地図を作ることが目的ではなく、地に足を付けて、今ここにある世界を、その場にいる人間が可能な限り、同じ高さの視点で認識する方に重きを置いていたからだ。

私たちは何に紐づいているのか

上記のようなパフォーマンスを通じて、私の「旅」への認識は大きく変わっていった。今までの「旅」が現実逃避だとしたら、今回の「旅」は、自身の立ち位置を確実に把握し、責任を引き受けるために必要なものだった。

異国の言葉の海に溶ける心地よさの裏には、いつも「自分はこの社会に属していない」という逃避があった。けれども、今回のフリブル滞在では、逃げ場のない現実と正面から向き合わざるをえなかつた。構造的な暴力や搾取を見つめる作品の数々、他者の声を聴くことの責任、沈黙することの重さ。そのどれもが、創作を続けるうえで何らかのポジションに明示的に立つことの難しさを突きつけてきた。

今年度は、ユニット内でも「インプットの年」として、主宰の升味と川村瑞樹それぞれがスイス(Festival Belluard Bollwerk International)/イギリス/香港/韓国(SPAF)へ赴き、5月には共にドイツ・ベルリンの演劇祭 Theatertreffenを視察した。異なる文化や文脈から生まれる作品を観ること、そして多様な背景を持つ人々と共に考え、母国語以外の言語で対話すること。それは同時に、自身のアイデンティティや価値観が何に紐づいているのかを顧みる行為でもある。

このような視察を通じて、作品だけでなく、創作に関わる個人そのものが文脈を再考し、視野を広げていくことができると感じている。今後は、主にアジア圏での海外公演の実現を目指し、多様な背景を持つ人々との協働を進めていきたい。

反響する声

あの展示室で響いた「あなたはどこにいるのか?」という言葉が、折に触れ頭の中でリフレインする。この「旅」を経る前から感じていたことではあるが、たとえ海を越え山を越え、はるか遠くの国で起きた惨状さえも、私たちの生活に深くかかわり、様々な消費の中で知らないうちに人や環境を蹂躪する蛮行を支援てしまっていることを、より切実に考えるようになった。時には、あまりにも自分や自分が加担する構造が醜悪すぎるのために、「もう人間をやめてしまった方がいいのでは?」と絶望的な気持ちになることもある。

そんな時に併せて思い出して力強く暖かいパワーをもらっているのは、参加者のナラとハラがかけてくれた言葉だった。

連日、搾取構造や植民地主義を描く高濃度な作品をインプットし続け、そこで感じたことを、他者に共有する準備が出来ないまま、かなり生の言葉で参加者とシェアしていく内に、押しつぶされそうな罪悪感を覚える様になり、パレスチナ人アーティストの作品について意見交換をする際、思わず言葉に詰まってしまった瞬間があった。そして正直に、私には何も言える事がないように感じる、とメンバーに伝えた。その時、二人が私の気持ちを(そんな必要はないのに)理解し

た上でこう言ってくれた。

「私たちも、直接的にしろ間接的にしろ、イスラエルを支援する国に税金を払っているし、自國の人々が虐殺されている今、この瞬間に、アートをする意味があるのか? 何の役に立つのだろうか? と不安になる瞬間がある。けれども、それでやめてしまったら、相手の思うつぼだよ。どんな形でも抵抗は続けるべきだし、例えば私たちの場合、『民族浄化に晒される土地である』という以上の、豊かな文化的アイデンティティが私たちの国にあるということを伝えて、非人間化の暴力に抗いたいんだ。」

言葉だけを見ると、とても力強く聞こえるけれど、彼らは一言一言絞り出すように、膝の上に置いた両の拳を強く握りながら、この話をしてくれた。そこにはたくさんの葛藤が見えた。今回のフェスティバルへの参加で、彼らに出会うことができたからこそ、知ることができた“パレスチナ人たち”ではなく“彼ら自身の”心の震えだった。

“旅に出る”というのは、私にとって今まで多くの場合、大勢の他者を通して自分をあえて見失う行為でもあったけれど、フリブルでの経験は、作品や生の対話を通して、自分の輪郭を社会の中により強く彫り込まれたような、そしてやるべきこと、意識すべきことがよりクリアになるような旅であったと思う。

勿論これからも、創作を続けていく上で、迷うことはたくさんあるだろう。時には、透明になりたい、この構造に加担しないために綺麗さっぱり消えてしまいたい、という個人の逃避願望が暴れ出すことも残念ながらあるかもしれない。それでもきっとそのたびに、楔のように打ち込まれたこの問いを、心の中で何度も繰り返す。

「私はどこにいるのか?」



photo: Kikuko Usuyama by CREA

升味加耀 (ますみ・かよ)

2016年、ベルリンにて果てとチーキを旗揚げ。以降、全ユニット作品の劇作・演出を担当。19年、『害悪』が令和元年度北海道戯曲賞最終候補作となる。20年、渋谷PARCO の新しいカルチャーフェスティバル P.O.N.D.に招聘。23年、『はやくぜんぶおわってしまえ』が劇作家協会新人戯曲賞最終候補作となる。24年、『くらいどころからくるばけものはあかるくてみえない』が岸田國士戯曲賞最終候補作となる。神話や都市伝説から材をとった非現実的で極端な設定と、ポップでドライな会話を用い、透明化された差別や断絶を、登場人物の混乱や葛藤、ショッキングな結末を通して活写する。25年12月から26年1月、新作公演『だくだくと、』を横浜・東京にて上演予定。

<https://hatetocheek.com/>

03

森下真樹
Maki MORISHITA

エベレスト街道を歩く旅と、 ベートーヴェンのルーツを辿る旅、 2つの縦走

私は生まれながらにして旅人なのではないかと思う。ルーツは九州、父親の転勤で関東や四国など3つの小学校を渡り歩いてきた。故郷はない。いや、むしろ故郷はたくさんあると言ってもいいのかもしれない。友達を早くゲットするためにあそびを開発しては人の気を引こうとしていた。「マキ手話」「つまさきごっこ」「エレベーターガーリごっこ」「ジョイナーごっこ」など、“なんじゃそれ?”的なあそびが私のダンスのルーツである。今でも変わらず“なんじゃそれ?”的なことをワークショップでやっているし、その延長に作品がある。人と面白く繋がるためにやっていたことがいつしかダンスになっていた。そしてそのダンスで幸せな出会いの場をつくることが私の目指す道となっていました。

なんじゃかんじゃで27歳でソロデビューしてから今年でもう50歳。20年以上積み上げてきたものを守りながら、たまにその“守り”がジャマするので、それを思いっきり放り投げ、いつでも真っ新で初々しくありたいと思う50である。そのためには……そうだ! 旅にでよう。というわけで、ここ数年、特に力を入れて取り組んできた「山を登ること」と「ベートーヴェンを踊ること」にフォーカスし「エベレスト街道¹⁾を歩く旅と、ベートーヴェンのルーツを辿る旅、2つの縦走」をテーマにセゾン文化財団のサバティカル助成に申請した。そして、2023年9月9日から11月19日までの2ヶ月半、サバティカルの旅にでた。

自分のルーツを辿る旅

スウェーデン、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリア、スイス、クロアチア、オーストリア、チェコ、タイ、ネパールと72日で11ヶ国を巡るひとり旅は日常から離れることでより自分とじっくり向き合えた時間だった。半端ない情報量のなかで自分にとって必要な情報を掘り出すことは容易ではなく、訪れた国々で自分と近い活動をしている人たちと繋がるには、FacebookなどのSNSでコツコツと人伝てにコンタクトをとるしかなかった。自分の旅の行程をSNS上でオープンにしていたおかげで、ダンスで繋がっている世界中の知人や友人から「遊びに寄りませんか?」と連絡をもらえた。これが嬉しかったし、実際に多くの交流が生まれた。ドイツでは知人の紹介でボン・ベートーヴェン管弦楽団(Beethoven Orchester Bonn)に所属する日本人演奏家に、ドイツでの音楽活動についてお話をうかがうことができ

きた。ベートーヴェンの楽曲で踊るプロジェクトについて興味を持ってください、コラボできる可能性があるかも? ということで興奮して帰国したが、それから2年、まだチャンスを活かせないでいる。クラシック音楽とダンスを繋いでくれるコーディネータがいたらいいのにな~。(これを読んでくださっている方の中でいらっしゃったらお願ひします!)

ヨーロッパでは「ここもうちずっと居たいな~」と思ったら居られるように緩やかに旅の計画をしていた。一部では宿をとらず現地へ赴き「よし! 今日はこの地に泊まろう」とその場で判断し、ネットで予約する。イタリアのアルテニヤの児童演劇祭でクロアチアの作品に興味を持ったので思い切ってクロアチアへ訪れるなど、旅で出会ったものがまた別の場所に誘ってくれた。イタリアのマントヴァでは、チェリストとのコラボパフォーマンスの機会に恵まれ、現地で生まれた非言語なコミュニケーションや現地のアーティストとの交流は格別な体験となった。

フランスに住む大学のモダンダンス部の先輩を訪ね、初めて30年前の自分の踊る姿をビデオで見た。面白いじゃん! 自分はこんな踊りをしていたのか?! あの時は30年後も踊りを続けているとは思っていなかった。彼らと発条ト(ばねと)²⁾で活動した時間は過去イチとんでもない冒険だった。ああそうだった、この時まだ見たことのない景色を見る、未知の旅がしたいと思って会社を辞めただけだった。発条トでの海外ツアーで有休が取れなくなり、OLを辞めてまでもダンスをやってみようと決断するキッカケとなったんだった。先輩と映像を見ながらそのことを思い出し、自分がなぜ、いま、ここにいるのかを感じられる時間となった。発条トよ、ありがとう。ベートーヴェンのルーツどころか自分のルーツを辿るような旅だった。

ベートーヴェンのルーツを辿る旅

ベートーヴェンの生誕地ボンへ。ボンは旧西ドイツの首都で、当時は小さい街ながら文化芸術が繁栄していた。1845年から毎年9月の1ヶ月間、ベートーヴェン音楽祭が開催されており、私はこのタイミングを狙った。この街のアイコンのように、中心地のミュンスター広場のみならず、怖い顔したのからカラフルでユニークなものまで、ボンのあらゆるところにベートーヴェンの像があった。生家は現在では博物館となっていて人で溢れていた。彼の生涯や作品に触れる能够で私は丸一日過ごした。彼が通ったレストランでランチをし、交響曲第6番『田園』を構想した散歩道も歩いた。彼がオルガンを演奏したボン大聖堂では神聖な雰囲気と静寂さでカメラのシャッターも押せなかった。ベートーヴェンの母マリア・マグダーレナのお墓も訪ねた。彼の故郷の原風景を堪能できるハイキングコース、ベートーヴェンの散歩道(Beethoven Wanderweg)を10km歩いた。多くの登山道が通っていて、下にはライン川が流れ素晴らしい景色を眺めることができる。彼が「第九」を手がけるきっかけとなったのがボン大学での詩人・劇作家のシラーとの出会いだが、ボン大学で交響曲第5番『運命』の演奏会があるというので駆

1) エベレスト街道: ネパールのルクラからエベレストのベースキャンプ方面へ続くトレッキングルート。世界最高峰エベレスト(8,849m)を間近に望むことができ、世界中から登山者が訪れる。

2) 発条ト(ばねと): 正式名はStudy of Live works 発条ト。1998年頃から2000年代前半に活動したカンパニー。白井剛(振付家・ダンサー)、栗津裕介(作曲家)らが中心メンバー。実験的なダンス作品を創作し国内外でツアーを行った。



ポン・ミュンスター広場のベートーヴェン像



バーデンにあるベートーヴェンハウスの前でポーズ



ウィーン国立歌劇場

け込んだ。あれ? 意外にも第九はそんなに演奏されないのか? やっぱり日本特有なのか? しかし『運命』を脳内で踊りながら興奮して拝聴、じっとしていられなかった。

ベートーヴェンが22歳から死ぬまで拠点としたオーストリアも訪ねた。彼が住んでいたアパートや、数々の名曲を生みだし「第九」の重要な部分がつくられたウィーン郊外のバーデンへ。ここはローマ時代から知られる保養地で、難聴が悪化していたベートーヴェンも治療や療養のために訪れた。ここでも彼が散策した道を歩き、葡萄畑が広がる広陵地帯、この豊かな自然の中で第九がつくられたのか~と興奮して、第九の振付のポーズで沢山写真を撮ってしまった。ベートーヴェンが好んで飲んでいたであろうこの地のワインもいただいた。美味い!

ベートーヴェンを知れば知るほど、奔放なダンスが容易に踏み込めるものではないとビビってしまった。死を間近で感じながらも大曲を生み出した彼の人間性と、作品に込められた思想や情熱を感じた旅。彼の光と闇を知ったことで、私も彼の全交響曲を踊らずしては死ねないという使命に駆られた旅となった。

ベートーヴェンを踊ること

私は音楽への強い憧れと嫉妬を原動力に踊ってきた。どうしたら音楽のバックダンサーにならざるにいられるのだろう。どうしたら踊りから音楽が聴こえてくるのだろう。いや、それよりも、どうしたら音楽になれるのだろう——これが私の究極のテーマだ。ベートーヴェンの音楽と出逢い「交響曲第5番『運命』」や「第9番」など圧倒的な音楽と対峙し、入り込む隙がないと感じながらも、どうにかしてしがみつき、ぶつかり、寄り添ったり、歯向かったり、スルーしたりと、音楽との距離を様々に変えながら音楽に拮抗するカラダへの挑戦をしてきた。ベートーヴェンはフランス革命という激動の時代を生きた人であり、音楽家にとって命である聴覚を失い、挫折と絶望を経験するが、それでも音楽家としての使命を果たすまでは死ねないと音楽家魂を燃やした人だ。すげーな。「逆境を乗り越え新境地へ」「苦悩を乗り越え歡喜へ」というベートーヴェンのテーマはまさに登山じや

ないか!

私が節目に明治神宮へ参拝するように、多くの人々は苦難に遭遇した時に「神」を求めてきた。その苦難の中で「友よ」「世界中の人々は兄弟になる」と歌う第九『歓喜の歌』は“歌”よりも“祈り”だと言う人もいるようだ。人生を闘うための味方としてのベートーヴェン。私にとってもいまやベートーヴェンの音楽は人生を闘うための応援歌であると言っても言い過ぎではない! 「♪フロイデ、シェーネル、ゲッテルフンケン、トホテル、アウス、エリジウム」登山中もこの応援歌がぐるぐる回っている。ベートーヴェンは当時、交響曲に合唱を入れるという型破りなことをやった。だからこそ自由なダンスの発想が入る余地がある。「お前もやれるもんならやってみるがいい」と天からベートーヴェンの声が聞こえる。なんという懐の広さか! 私も前代未聞がやれるだろうか。

山を登ること

2017年から山を登り始めた。そのキッカケをくれたのが写真家の石川直樹だ。彼に自身のソロ³⁾「ベートーヴェン交響曲第5番『運命』全楽章を踊る」の第3楽章を振付してもらったことから始まる。これまで自作自演(自分で自分を振付けること)は散々やってきたが、この大曲に立ち向かうには、自分の知らないところへ飛び込むしかないという思いから「森下を突いてください。動くキッカケをください」と4人に振付をお願いした。中でも振付家ではない石川さんに振付を依頼するとは前代未聞(2回ほど断られたようだがそのことは終演後に気づく)。

石川直樹著『最後の冒険家』は私のバイブルであり、20年以上かけてヒマラヤに遠征し、8000m峰全14座登頂を達成し、まだ見ぬ

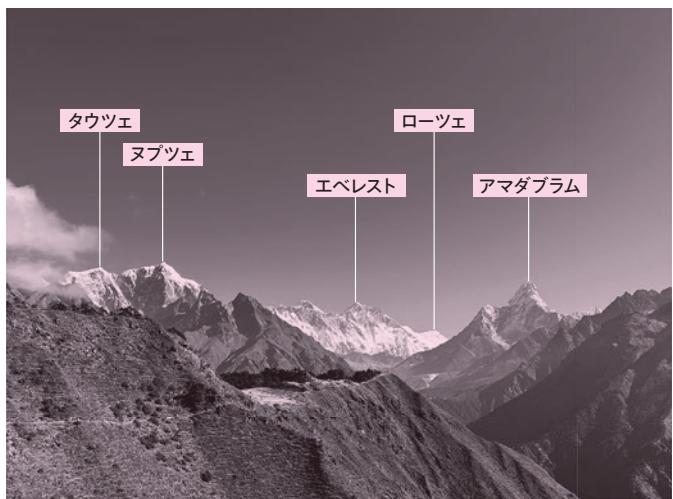
3)「ベートーヴェン交響曲第5番『運命』全楽章を踊る」:2017年森下スタジオで初演された森下真樹のソロダンス作品。ベートーヴェンの交響曲第5番『運命』全4楽章を一人で踊り切る。各楽章を異なる振付家・アーティストが振付を担当するという異例の試み。第1楽章は演出振付家のMIKIKO、第2楽章は俳優・ダンサーの森山未來、第3楽章は写真家の石川直樹、第4楽章は舞踏家・振付家の笠井覗。2017年以降もピアノやフルオーケストラと共に演じる。

世界を切り拓いていく様は『運命』のテーマにぴったりだった。まさかの富士山5号目で同氏と待ち合わせをし、2人で富士山登頂することそのものが『運命』第3楽章の振付となった。これが私の初登山。最悪の天候、高山病気味で体調もボロボロ、もう二度と登るか!と心に誓ったがその後山にハマリ、世界最高峰である「エベレスト」をこの目で見てみたいと思うまでになった。なぜこんなにしんどいことをやるんだろう? しかも高所恐怖症。

山を登っている時は綺麗な景色にうっとり目を向けるが、7割くらいは内側の自分の相手をしている。これを内観というのだろうか。この内観がいいのだ。舞台がひとつ終わっても、あーすればよかったと、しつこく頭を支配し、なかなか終われない。ゴールを感じられないモヤモヤな日常を、ゴールある登山が清々しいものにしてくれる。そして何よりも山から「チカラの抜き方」を教えてもらっている。どうしたら呼吸も速度も安定させた歩きができるのか? 左の足底筋膜炎、右膝痛、両肩のピリピリと、いつも同じ部位が痛む。チカラが入り過ぎて、アンバランスなカラダのクセを自覚する。どうやってチカラを抜けばいいのか? この先長く踊り続けるためには「チカラの抜き方」を知る必要があると思う。

そしてエベレスト街道へ

2023年11月3日、ネパール入国日に大地震に遭遇。震源地は500Kmほど離れていたが、ネット環境も悪く日本からの「生きてるか?!」の返信もできず心配をかけた。エベレスト街道の入口である



街道から望むエベレスト

ルクラ空港は標高2800m、たった400mの滑走路で崖っぷちを離着陸、有視界飛行で8000m級の山々をすり抜けて飛ぶ時間はアトラクションに乗っているかのようでスリル満点。これが世界一危険な空港と言われる所以。物価は標高に比例していた。宿泊は10日間全てロッジで寝袋。エベレスト街道を歩く旅の最後の晚餐ではガイド、シェルパ、ポーター、シェフがネパールの音楽で踊るというおもてなしをしてくれたので私も日本の音楽で踊り、感謝の気持ちを伝えた。ザ・踊り交換。街道で何度もすれ違った、神々しく、荷物運搬や食料として現地の人々の生活に欠かせないヤクが最後の晚餐でステーキとなって食卓に現れた。ガーン。険しい山岳地帯の貴重なタンパク源をありがたく頂いたのだが、硬くて美味しくなかった。日本を発つ数ヶ月前から低酸素ジムでランニング、ヨーロッパを巡っている間も登山で体力づくりをしていたおかげで、富士山の時のような高山病にはほとんどならず、うまく高所順応ができた。

なんと自分はちっぽけなんだろう

エベレスト街道を歩く旅で味わった、厳しさの中に息を呑む絶景、この上ない達成感。稽古場では得られない厳しい環境でのカラダを使い果たす感覚。充実した疲労感。カラダ丸ごと自然の中に飛び込み、抗えない自然と対峙していると「なんと自分はちっぽけなんだろう」とあらゆる重圧から解放され自由な気持ちになる。カラダはヘトヘトでオモリみたいたが気持ちは軽やか。まだ知らない世界があることを知ると、知らない世界をもっと見てみたいと欲が出る。神秘の、未知の世界に触れることがあります膨らむ好奇心。好奇心は希望。「好奇心は希望の別名にはかならない」とジュリアス・チャールズ・ヘア⁴⁾も言っている。過酷な環境で生きる人たちの逞しく生きる姿に勇気をもらう。標高3000m以上で生息する崇高なるヤク。大自然への畏怖の念。8000m峰の山々に360度囲まれ目にした朝日は写真に全く収まらない。

こうして日常を過ごしている間にも、あの山々は変わらずにあそこにある。電車に乗って稽古場へ向かう間にも、舞台上で照明を浴びている間にも変わらずに存在している。変わらずにあそこにある

4) ジュリアス・チャールズ・ヘア (Julius Charles Hare) : 1795-1855年。イギリスの聖職者・作家。格言や警句を集めた著者で知られる。「好奇心は希望の別名にはかならない」という言葉を残した。



エベレスト街道4日目: クンデ・ピークにて



エベレスト街道6日目: タンボチエ・リにて



エベレスト街道6日目: タンボチエ・リにて(背景に見える雪山の中央にあるのがエベレスト)



中央に見えるのがエベレストの山頂

ものと、あそこを歩いたカラダの記憶がひとつになる。雄大な景色の一端に自分の足跡が残せたことが大きな自信となる。エベレスト街道を歩く旅がひとつ達成したことでこれから先に降りかかる困難も乗り越えられるのではないかと思えてくる。

激動の時代を生き抜き200年経った第九の音楽からも、逞しさと懐の深さ、その雄大な存在に「いま」を生きる必然を実感させてくれる。悠久の時を超え、この先の未来を辿る道のほんの一瞬に私たちがいる。私たちの存在はちっぽけで偉大だと感じられた2つの縦走である。「どうせちっぽけなのだから……」と思えることがなぜか心地良くその途方もない開放感が「もっとやれ」と自由で身軽にさせてくれる。

サバティカルを振り返って

“旅”という限られた瞬間、つまり非日常だから思い切れたサバティカルの旅だった。単純計算すると1ヶ国滞在が6日。めちゃくちゃ忙しかった。サバティカル(休暇・充電)なのだからもっとゆったり過ごせばいいのに。自分はこういう忙しない旅を選んだが、旅は自分次第でどんなものにもなる。

私は100人100様をモットーに、答えは決してひとつではなくいろいろな見方ができ視野が広がるようなことを理想として活動してきたが、この旅によってもっと世界中の人たちとダンスで繋がりたいと強く思うようになった。だって世界にはいろいろな人がいたし、人間みな違ってみな面白いんだもん。人種や国境を超えて、争いごとなく、お互いを受け入れ、対立ではなく認め合い、力を合わせることの美しいことよ。「生きとし生けるものみな兄弟」(ベートーヴェン)。

コロナ禍では人と会わざとも繋がれることを経験し、制約の中でも新たな発想で当たり前だったものを別のものに転換させ、新しい価値を生み出せることも知った。自分が頑なに守りたいものが何なのかを考えるキッカケにもなり、得るものもあった。しかしそれ以上に現場のエネルギーを共有する尊さを改めて実感した。この目で触れ、やっぱり会いたい人には会いに行く。故郷がない私にとってそこを訪れるに必ずある“場所”や迎え入れてくれる“人”は宝である。会わなくても繋がれるネット時代、訪れなくても飛び交う情報で訪れた気にもなれるが、ぜひ自分の足で歩いてカラダ丸ごと飛び込む旅の面白さを、特に若い世代に知ってもらいたい。本当の旅

とは、湧き出る好奇心に振り回され、新しい自分に出会うことなのかもしれない。

私はこれからも自分を突き動かす源を絶やさぬよう、好奇心と、ズレと、人と繋がりたい欲を磨いていきたい。いつでも変化を受け入れ、軽やかに生きていきたい。そして私は、自分のカラダを通してでしか振付ができないのだから、歳を重ねてもダンサーであり続けるためにカラダとの向き合い方を考えていきたい。

登れ、登れ、山を登れ。

最後に私の座右の銘で締めくくろう。

「青山元不動 白雲自去来」(せいざんもとふどう はくうんおののづからきよらいます)

青々とした山のように本来の心を不動のものとし、流れていく雲(一時的な感情や煩惱)に惑わされず泰然自若としているこの教えを意味する。山は変わらずそこにあり続け、雲は常に形を変えて現れては消える。それと同じように、人生における変化や煩惱に動じず、本来の自己を見失ってはならない。

旅先で出会った全ての方々に、そしてサバティカル助成してくださったセゾン文化財団に感謝いたします。



森下真樹 (もりした・まき)

振付家／ダンサー。幼少期に転勤族に育ち転校先の友達作りで開発した遊びがダンスのルーツ。これまでに10か国30都市以上で作品を上演。様々な分野のアーティストとコラボレーションをし活動の場を広げる。近年は音楽に挑戦してベートーヴェンの楽曲を取り組む。ソロ「ベートーヴェン交響曲第5番『運命』全楽章を踊る」(振付: MIKIKO、森山未來、石川直樹、笠井叡)や、森下スタンドによる全力で歌い上げるかのような祝祭感溢れる群舞「踊れ、第九!」を展開。100人100様をモットーにワークショップや作品づくりを行う。周囲を一気に巻き込み独特な「間」からくる予測不能、奇想天外ワールドが特徴。第8回(2014年)第19回(2025年)日本ダンスフォーラム賞受賞。2015年～2017年(公財)セゾン文化財団シアフェロー。(一財)地域創造「公共ホール現代ダンス活性化支援事業」登録アーティスト。

<https://maki-m.net/>

04

山本美子
Mugiko YAMAMOTO

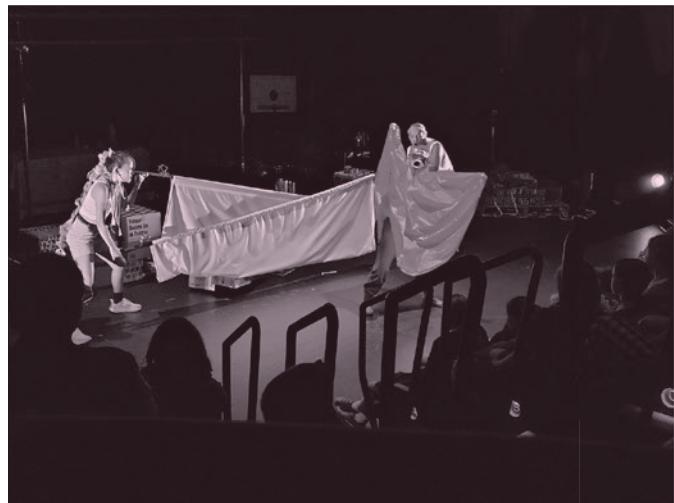
旅が与える力 —正解のない世界を歩く—

プロセスが目的の旅

私は現在、文化庁新進芸術家海外研修制度の研修生として、スカンジナビア半島の北海油田の街スタヴァンゲル（ノルウェー）に滞在しながらこのレポートを書いている。私にとっての2025年はまさに旅する一年だった。南極探検基地としてかつて開拓されたタスマニアのホバート（オーストラリア）からスタヴァンゲルまで、地球を南から北へとメルボルン、シンガポール、エдинバラ、ユトレヒト、サンタルカンジエロ（イタリア）……。短期間で急ぎ足で訪れた国や街を含めると今年滞在した街は12カ所以上。これまで“旅”は視察や打合せ、ツアーやフェスティバルへの参加など、明確な成果を求める出張であった。そんな私にとって出会いやプロセスそのものを目的とする“旅”は人生初の経験。“何となく落ち着かない自分”をも味わいながら過ごしている。

旅の話を始める前に、私自身のことを少し説明したい。私は愛知県芸術劇場で2014年から2024年5月まで10年間演劇担当プロデューサーを務めていた。劇場での仕事はAAF戯曲賞の運営、公演やツアーのプロデュース、海外作品の招聘などの公演事業に加え、劇場の情報保障整備、多文化共生アウトリーチ、人材養成プログラムのコーディネート・運営を担当。その後、2024年3月に新しく開館したSLOW ART CENTER NAGOYAに転職し、アートプロジェクトとしてのアートセンター立上げに携わった。無我夢中で走り続けた11年間を振り返ると人と人との繋がりを“数”ではなく“個人”として捉える場への希求だったことに気づく。その想いは劇場時代に関わった海外の子ども向け作品Theatre for Young Audiences（以下、本文中TYA）シーンへの共感となりTerrapin Puppet Theatreとの協働、フェスティバルリサーチ、そして現在の海外研修へと至っている。

そう、今年初めの“旅”はオーストラリアのTerrapin Puppet Theatreが愛知県芸術劇場と創作した『ゴールドフィッシュ～金魚と海とわたしたち～』（英題：『Goldfish』）ツアーだった。この作品は創作のためのリサーチやディベロップメントに3年以上かけており、大人向け作品のクリエーションと同じかそれ以上の充実した創作期間を設けることに驚いた。そしてその過程から私が学んだのは、子どもたち（観客）を信頼し、子どもたち自身に問題と対峙し解決する力があるのだとエンパワーメントする思想だ。愛知県芸術劇場退職後もコーディネーターとして作品に関わり、2025年に同劇場で初演、国内ツアーのうちAsia TOPA（メルボルン）、March On（シンガポール）、Ten Days on the Island（タスマニア）のフェスティバルと共に回り、作品を通して多くの人と関わることができたのは幸運であった。



『Goldfish』 Ten Days on the Island（タスマニア）公演舞台写真

世界のTheatre for Young Audiencesの現在地

さて、この機会に海外のTYAシーンについてもう少し紹介したい。日本では子ども向けの舞台は「児童演劇」と呼ばれることが多く、演劇のイメージが強い。しかし海外では演劇だけに限定されずダンス、音楽、オペラ、サーカス、インスタレーションパフォーマンス、そしてユース活動（子どもたち自身が演劇やダンスを行う活動やその作品）まで、舞台芸術の幅広い分野で子ども向けの作品が創作されている。ジャンルの多様さに加え、対象年齢区分も細かく定められていることが多い。例えば、0歳から24カ月の乳児向け、3歳から5歳までの歩けるようになった幼児向け、6～8歳向けは、座って見てられるようになったばかりの子ども向けの短めの作品、と区分される。年齢区分は国や教育制度によって多少変わるが、アーティスト側は作品を発表する際にどの発達年齢の子どもをメイン対象にしているか明確な説明を求められる。また、10歳以上を対象とした公演では、生と死などの抽象的な概念、アイデンティティに関わるテーマや社会問題が扱われ、複雑なコンテクストを理解する力が必要な作品も多い。

この細かな段階的配慮の根底にあるのは、子どもの人権尊重の基本理念である。子どもの権利条約を中心軸に共有されているこの思想は、子どもたちへの差別の禁止、生存権、文化権、自己決定権を認めることから始まる。この基本姿勢の上に立つと、子どもたちを観客として対象にした舞台芸術は単なる「娯楽」や「教育」の領域を超えて、子どもたちが当事者として社会と繋がる機会を提供し、より良い市民社会、民主主義を作る基盤として認識されている。

そして現在、最も重要視されているのは舞台芸術が持つ「子どもたちをエンパワーメントする力」である。ここで求められるエンパワーメントは単に子どもたちを勇気づけ自信を持たせる事だけではない。自分を取り巻く世界—気候変動、戦争、ジェンダー、さらに移民・先住民族・セクシュアリティなどのマイノリティに対する差別といった“複雑”な状況—に対してフェスティバルや劇場、作品を通して子どもたちが自分なりの視点で向き合い、他者を知り、議論し行動を起こすきっかけを作ることこそ重要なと考えられているのである。例えば、オーストラリアでの『Goldfish』公演では、環境破壊の問題に対して子どもたちが自ら考え立ち向かう物語であることに加

えて、主役がオーストラリアに移住して俳優活動をしている日本人女性であることも評価された。メルボルン公演で観客から「アジア系である自分の子どもに、白人ばかりではなくアジア系の人も舞台で活躍している姿を見せたかった」というコメントが寄せられたことは象徴的であった。

フェスティバルを巡る“旅”

さて、旅に話を戻そう。『Goldfish』ツアー同行後、セゾン文化財団の海外リサーチ活動支援をいただいた「海外の現代児童演劇・ダンスのネットワークづくり、交流リサーチ」プロジェクトに着手した。5月20日～7月15日までヨーロッパのフェスティバルのTYA作品を中心にリサーチし、関係者とのネットワークづくりを行う“旅”である。2カ月にわたるリサーチのなかで特に印象的だった3つのフェスティバル Edinburgh International Children's Festival、Festival Tweetakt、Santarcangelo Festivalについて紹介したい。

●Edinburgh International Children's Festival (イギリス)

このフェスティバルは、ディレクターのキュレーションが効いた充実したプログラムと、年間を通した人材育成の両面からイギリス、ヨーロッパのTYAシーンの中で信頼されている。小学生向けの公演では公演後Q&Aセッションが用意されていることが多い。中でも今年驚いたのがダウン症のユースグループの鑑賞に対しても公演後のQ&Aトークが用意されていたことだ。出演者は彼らの発する単語や表情/しぐさから何に关心を持ったか、何を伝えたいかを読み取り、(時にコーディネーターの助けを借りながら)直接会話を重ねていた。「障害の有無にかかわらず発言の機会がある」という理念の実践は美しい対話の時間であった。

ボランティア参加のシステムも秀逸だ。ボランティア運営の専任コーディネーターがボランティア自身のスケジュールや興味に合わせて参加できるよう調整する。また、参加前に配布されるマニュアルにはボランティア参加者の権利や求められるホスピタリティ、ハラスマントの相談先などが明記されている。子どもであっても、ボランティアであっても、その人の関心や専門性、背景を尊重し、その人なりの方法でフェスティバルに参加できる場所を作る姿勢が、フェスティバル全体の居心地の良さに繋がっていた。



Edinburgh International Children's Festival(エдинバラ)
ダウン症のユースグループとのQ&Aセッション

●Festival Tweetakt (オランダ)

このフェスティバルの大きな特徴は、「現代アートを子どもたちにも開く」というコンセプトだ。週末には郊外の砦(遺跡)に秘密基地を思わせる公演会場を設営。親子がピクニック気分で来場し、現代アートのインスタレーション作品を恐る恐る覗き込み、サーカスを見るような野外劇場でコンテンポラリーダンス作品を観る—子どもも大人も好奇心をくすぐられて参加したくなる雰囲気が作られていた。

特に印象に残った作品として若手のシアターコレクティブNon Creators Company『Ôskwanteklip』を紹介したい。炎天下の丘の上、黄色い家に住む老夫婦。初めは体が思うように動かない二人の日常がユーモアとペースを持って描かれ、次第に現実と虚構が混濁し二人の死へと展開していく。高齢者の認知症・孤独死という重いテーマをシュルレアリズムの絵画を想起させるビジュアルで詩的に描いた作品であった。

このアーティストも含めて何組かの若手アーティストがフェスティバルから作品創作を委嘱されていた。地元の小学校の子どもたちにワークインプログレスの段階で見せてフィードバックを得ながら創作・発表され、フェスティバル同士の連携でツアー展開するシステムが構築されている。

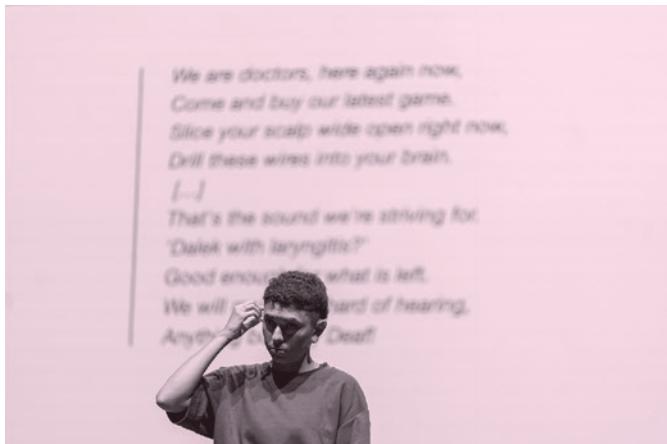


『Ôskwanteklip』Festival Tweetakt(ユトレヒト)公演舞台写真
Max Laros and Rosita Segers / Non Creators Company

●Santarcangelo Festival (イタリア)

イタリアのサンタルカンジェロで開催されたこのフェスティバルの今年のテーマは「Not Yet」。“マイノリティのエンパワーメント”という言葉の榨取性に極めて自覺的な、衝撃的ともいえるプログラムであった。ジェンダー、LGBTQ+、障害当事者、少数民族、移民—こうしたテーマが“多様性のために”並べられるのではなく、マジョリティが作るアートシーンへの批評性を強く持つアーティスト/作品として紹介されていた。

特に印象的だったのが、Diana Anselmoによるレクチャーパフォーマンス『Pas Moi』だ。聴覚障害とクイア当事者であるアーティストDiana Anselmoが、20世紀のメディア史がいかに音声中心主義だったか、聾者とのコミュニティ・文化がいかに無視されてきたか、ブラックユーモアを交えながら炙りだす。無音の中、手話によるレクチャー、ワンテンポ遅れて表示される字幕、効果的に扱われる“音”的表現、すべてが雄弁であった。日本にルーツを持つポーランド人Hana Umedaによる『Rapeflower』もヨーロッパとアジアの文化コンテクストのはざまで揺れる移民三世としての自身のアイデン



『Pas Moi』 Santarcangelo Festival(イタリア)公演舞台写真
Diana Anselmo / Photo: Pietro Bertora

ティティを地唄舞の身体に重ねた作品で鮮烈であった。フェミニズムの大きな潮流のなかで過小に扱わがちなアジア系移民女性としての立場から生まれた切実な表現が衝撃を持って受け止められていた。

“旅”をする中で見えてきた海外のフェスティバルシーンに共通する大きなトレンドは「国際性から地域性への回帰」である。コロナ禍前は世界中から「今注目されている作品」を集めることでディレクターの力や国際性を示すことに大きな立脚点を置いていた国際フェスティバルは、コロナ禍で足元を見つめ直す必要に迫られた。さらに、ヨーロッパでは戦争が隣に迫り、価値観が多様化/分断される状況において、集客数を競い一体感・祝祭感を味わう大型のスペクタクル作品をどのように位置づけるかが難しくなっている。その結果、若いアーティストの支援、アートシーン内で見過ごされてきたマイノリティ・コミュニティ、その拡張性や批評性に可能性が見いだせないか—こうした問い合わせが、フェスティバルのアートシーンに広がっている。

日本の状況への課題意識

話題をTYAに戻そう。海外フェスティバルのトレンドや、様々な国のTYA関係者と話す中で改めて感じた子どもたちの主体性の尊重、一人ひとりの尊厳への向き合い方、エンパワーメント。この世界的な潮流と比較すると、日本の子ども向けの舞台芸術における課題が鮮明に見えてくる。そしてさらに深刻なのは、その業界の停滞が単なる業界の問題に留まらず、日本の社会問題そのものに繋がっているのではないかということだ。

ここで、日本の子どもを取り巻く環境についてのアンケート結果を参考したい。日本財団の18歳意識調査(ウェブアンケート)によると、「自国の将来が良くなるか」という質問に対して、日本の若者はわずか15%しか「良くなる」と答えなかった。同じく「自分の行動で国や社会を変えられるか」という問い合わせに対しても肯定は46%に留まり6カ国中最下位である¹⁾。つまり、半数以上の若者が「自分たちは社会を変えることができない」と考えている。さらに、意見表明権の認知も低く、こども家庭庁の調査では「こどもには『自分に関係すること



ノルウェー研修中の著者。dybwikdans『Wonder』出演者と
ブレーケストーレンにて

とについて、意見や気持ちを聞いてもらえる権利』(意見表明権)があることを知っていますか。』という質問に対して、半数以上が「聞いたことが無い」と回答し、調査5カ国の中では群を抜いて高い²⁾。

日本のTYAシーンはどうだろうか。実はこの“旅”的途中で数名のTYA関係者から「日本のフェスティバルやカンパニーなどでは年配の男性の発言権が強く、メンバーも長年変わっていないように見えるが実際どうなのか?」と質問された。確かに、近年ヨーロッパだけでなくアジアのTYA関係団体にも女性責任者が増え、私よりも若い世代が活躍している姿を見かける。少子化による予算削減のなかで児童演劇の運営団体が高齢化し若手が活躍できる場が少ない日本の状況は外から見るとかなり特殊である。作品にも運営側やアーティストのジェンダーバイアスやパートナリズムが色濃く出ており、子どもたちの主体性や自己決定権を尊重する姿勢が弱い。また、LGBTQ+、移民、障害といったマイノリティをサポートする機運もほぼみられない。つまり子どもたちをエンパワーメントすべき現場自体が、エンパワーメントされていない、古い価値観に囲まれた世界になっている。この構造的な矛盾が、日本のTYAシーン全体を大きく停滞させているのではないか。

揺れる世界の中で

世界的に排他的なナショナリズムが台頭し、様々な形での差別的言論が増加している。日本でも、7月の総選挙以降移民やマイノリティへの排除的な姿勢が一層露わになり、子どもの人権や夫婦別姓といった個人の基本的権利さえ、古い家制度の価値観で固定されたままだ。日本の政治的な排他性と、日本のアートシーン全体

1) 日本財団、18歳意識調査「第62回 一国や社会に対する意識(6カ国調査)一、自国の将来について「良くなる」と回答した割合:中国80.5%、インド78.3%、韓国41.4%、アメリカ26.3%、イギリス24.6%、日本15.3%「自分の行動で、世界や社会を変えられると思う」と答えた割合:中国83.7%、インド80.6%、アメリカ65.6%、韓国60.8%、イギリス65.6%、日本45.8%

2) こども家庭庁「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査(令和5年度)」意見表明権の認知:こどもには意見表明権があることを知っているか(5カ国比較)「どんな内容かよく知っている」と回答した割合スウェーデン33.2%、フランス31.4%、アメリカ31.2%、ドイツ21.9%、日本8.0%。日本の子ども・若者が「聞いたことがない」と回答した割合:50.3%

における停滞は、同じ根源を持つ問題ではないだろうか。環境問題、戦争、障害、移民、ジェンダー、セクシュアルマイノリティ—これらのテーマを扱った作品は(大人向けには)数多くあるが、業界内でこれらの課題に本気で向き合っているのだろうか。特に未来を担う子ども向けの舞台芸術に関わる時、どうだろうか。男性年長者優位の意思決定構造、ジェンダーバイアスに満ちた人選、多様性の排除。これらの課題に対して、痛みを伴ってでも自ら変わろうとしているだろうか。例えば子どもたちを選択肢があり意見表明できる人格として尊重しているか? 職員やインターンシップ生として、外国籍の人や障害のある人を登用できる体制を整えられるか? 育成対象として、先住民族や移民、セクシュアリティなどのマイノリティアイデンティティを持つアーティストを積極的に支援できるか? 障害のあるアーティストやアートマネージャーに対するサポート体制はどうか? 答えは、現時点ではほとんどの場合“No”だろう。若い世代が絶望するのは、理想を言いながら自らの体制は変えようとしている業界の姿勢そのものに対してではないだろうか。

それでもなお、今年の“旅”で見てきた価値観と実践は、別の可能性を示唆している。課題を認識するだけではなく、様々な人や組織との関わりの中で、考え続けること。完璧な答えを求めるのではなく、課題に向き合い、試行錯誤し、その過程で新しい関係性や価値観を紡ぎ出すこと。その営みの中にこそ、社会を変えられる可能性がある。

揺れ動き正解のない世界を旅して1年。様々な運営形態、多様な関わり方、当事者性。こうした出会いの中で、自分の立脚点を疑いながら世界に向かい続ける力が必要であると痛感してきた。この後1月にエディンバラに移動し、もう少し私の“旅”は続く。多面的/多視点的“ネットワーク”的営みの中に見る未来に希望を探したい。



山本麦子 (やまもと・むぎこ)

演劇プロデューサー・コーディネーター。1982年名古屋生まれ。名古屋大学経済学部卒。広告代理店勤務を経て2014年4月愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)に就職。プロデューサーとしてAAF戯曲賞、プロデュース公演、ファミリー・プログラム県内巡回公演、インターンシップ等を担当。2024年5月から2025年1月までSLOW ART CENTER NAGOYA立上げにプロジェクトマネージャーとして携わる。2025年5月~7月、セゾン文化財団海外リサーチ活動支援事業としてヨーロッパの児童演劇・フェスティバルをリサーチ。9月より文化庁新進芸術家海外研修研修員(演劇)としてノルウェー・イギリスにて研修中。

<https://note.com/mugikoyamamoto>

セゾン文化財団 ご支援のお願い

セゾン文化財団では、当財団の趣旨に賛同し、活動を支援していただける法人賛助会員および個人の皆様からのご寄付を募っております。

新しい文化を創造するアーティストや研究者の活動に、ぜひお力を貸しください。

詳細につきましては下記URLにてご覧になれます。

<https://www.saison.or.jp/support>

当財団の活動に対しましてご理解・ご支援をいただいている以下の法人賛助会員および個人の皆様に深く感謝いたします。

(五十音順)

法人賛助会員のご紹介(2025年度)

セゾン投信株式会社	https://www.saison-am.co.jp/
株式会社パルコ	https://www.parco.co.jp/
株式会社良品計画	https://ryohin-keikaku.jp/

寄付者ご芳名(2024-25年度)

市村作知雄様	中村恩恵様
大澤寅雄様	福井健策様
小野晋司様	吉本光宏様
田中里奈様	匿名(2名様)

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター 第108号

2025年12月20日発行

編集人: 久野敦子

編集: 稲村太郎、福富達夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒135-0004 東京都江東区森下3-5-6

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <https://www.saison.or.jp>

E-mail: foundation@saison.or.jp

●次回発行予定: 2026年3月

●本ニュースレターをご希望の方は送料(180円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。

最新号およびバックナンバーは当財団の以下のウェブページでもお読みいただけます: <https://www.saison.or.jp/library>